瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
年間第 24 主日　A 年（2023 年 9 月 17 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：シラ書　27 章 30 節― 28 章 7 節
第二朗読：ローマの信徒への手紙　14 章 7 ― 9 節
福音朗読：マタイによる福音書　18 章 21 ― 35 節

ゆるす

三つの朗読から

第一朗読では「憤りと怒り」が復讐という罪の動機となります。しかし、自分と同じ「人間に憐れみをかけ」れば（4 節）、自分の罪の赦しを願うのは可能となります。弱い者同士である人間が「憤りと怒り」を持ち続けたら、誰もその人の罪を赦すことはできないのです（5 節参照）。ですから、「隣人に対して怒りを抱くな」（7 節）と強く勧めています。

第二朗読には「生きる」ということばが何度も登場します。神に生きるようにと招かれているキリスト者は、同じく父なる神に生きた主イエス・キリストの生き方が模範となります。「わたしたちは主のもの」（8 節）という表現はわたしたちのいのちがキリストに属していることを教えてくれます。

福音朗読は無制限の赦しについてのたとえです。赦しを受けた人は、隣人への赦しを行うはずです。しかし、このたとえに登場する家来には寛容さがありません。「憐れに思って」(27 節)、「憐れんでやる」（33 節）が印象的な表現となります。深い同情を表すこのことばのおかげで赦しが成立し、関係が回復していきます。赦しとは関係の回復に他ならないのです。

説教：ゆるす

先週の福音朗読では「兄弟」となる、「兄弟」を得るがテーマでした。今日の福音朗読ではその兄弟が罪を犯した場合の「赦し」がテーマとなります。

21 節に「何回赦すべきでしょうか」とあります。ユダヤ教のラビたちは兄弟を赦す回数を三回までと教えているそうです。ペトロのイエスさまへの問いかけは「七回までですか」とありますから、ずいぶんと優しい、寛容なものとなっています。しかし、ペトロの関心は赦す回数にあります。つまり、ペトロは赦しを我慢と捉えていたのではないでしょうか。相手から何か損害を受けても三回までなら我慢できる、あるいは七回までなら我慢できるという発想です。しかし、人間の我慢には限度がありますから、そのような赦しは本当の赦しにはなっていないでしょう。

28 節の「仲間」はギリシア語ではシュンドゥーロスといいますが、「一緒に」を意味する接頭辞シュンと「奴隷」を意味するドゥーロスとが組み合わさった合成名詞です。一緒の奴隷、奴隷仲間、他の者と一緒に王に仕える家来という意味です。この家来は、わずか百デナリオンの負債を抱えている仲間を訴えました。一万タラントンと比べると百デナリオンはほんのわずかの金額です。王が家来の負債を帳消しにしたのは、我慢したからではありません。「主君は憐れに思って、彼を赦し」たのです（27 節）。王の深い憐れみが赦しを引き出します。王は自分の金を取り戻す（しかも高額な金を！！）よりも、この家来との関わりを大切におもっていることがうかがえます。ここから赦しの本質が見えてくるでしょう。つまり、赦しとは断ち切れそうになった人間関係を、回復することです。本当の損害とは金銭や物質的な被害ではなく、兄弟の交わりが損なわれることなのです。しかし、せっかく赦してもらった家来は、まったく逆のことを自分の仲間にしてしまいます。

33 節の王の言葉「お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」は印象的です。家来が大切にしようとしたのは、王や仲間との交わり、関係ではなく、自分が貸し付けたお金だったのです。神の前で仲間として生きているなら、深く憐れんで赦してくれる神に出会った人は、兄弟を互いに心から赦す者になるでしょう。

おしらせ

教皇フランシスコは 2023 年 9 月 16 日正午（現地時間）、東京大司教区の補佐司教を任命なさいました。被選補佐司教さまはレンボ・アンドレア（LEMBO, Andrea）です。

司教叙階式は 12 月 16 日に予定されています。新しい司教さまのためにお祈りください。

10 月 29 日は、「ロザリオ祭」として、ミサの時間は 7 時と 10 時半だけです。

アントニオ会館の庭でミサをささげて、軽食を楽しみましょう。